

## 第8話 平治の乱

保元の乱の後始末に無理があったために、間もなくまた戦いが起こる。

源氏が全く敗れて、平氏の勢いは朝日の昇るように盛んになる。

### 源義朝の不平

保元の乱に最も手柄のあったのは、いうまでもなく源義朝です。彼は天皇方の大將軍として軍の評議の席で、謀を立てた上に、白河殿へ押し寄せて行ってからも、最も奮戦して早く勝利を取めたのでした。ですから、若し公平に戦功を論じたならば、勿論、彼が第一であるべき筈だったのですが、実際はちがいました。

義朝が従五位下に叙し、左馬頭に任ぜられたのに対して、清盛は正四位下安芸守から播磨守に進み、ついで大宰大貳に任じ、間もなく正四位上に昇ったので、その地位は遥かに義朝の上に在った。のみならず、初め、義朝は、前にも述べたように、この一戦に勝利を得れば、再び源氏の勢力を盛んにすることが出来るであろうと、それを心に望んだればこそ大いに勇んで出陣したのだ。しかし、戦いの終わった後には、父や弟らの命乞いもついにお聴しを得ることが出来なかったので、世間からは却って父を斬ったという汚名をさえ蒙った上に、源氏は淋しく自分一人となった。

又、日頃から望んでいた昇殿こそは許されたが、これとて源氏は自分一人であるのに、平氏は清盛を始め、頼盛、教盛、基盛、重盛などと相並んで幾人もあるのです。尤も、平氏は忠盛の時から朝廷との関係が深く、従って官位も高かったのだから、その点からいえば不思議ではないが、同じく武臣として殿上に肩を並べる義朝の身にとっては、これも堪えられない屈辱に感じられた事であったでしょう。

### 義朝の苦心

では、この、何もかも平氏に劣って淋しくなった源氏の勢いを盛んにするにはどうしたらよいか？ 保元の乱後に義朝が専ら苦心したのは、これでした。彼はいろいろと考えた末に、それには当時宮中で最も勢力のあった少納言入道信西に近づくのが一番近道であると思ったので、自分の娘を信西の子の是憲の妻にして貰いたいと申し込んだ。ところが、信西は以前から義朝の武骨一遍なのを嫌っていたので、「わしの子は学者であるから、武人の婿にする訳にはいかない」といって、はねつけました。

義朝は立腹したが、これは仕方のないことであるから、諦めていると、間もなく信西はその子の成範のために、平清盛の娘を貰って娶わせた。武人の婿にはしないと口はまだ乾かぬうちに、同じく武人の清盛の婿としたのです。義朝はこれを聞くと大いに怒って、折あれば信西に対して怨みを晴らそうと決心した。一つは彼に近づくことが出来なくなると共に、彼のために父や弟らを斬らしめられた遺恨も蘇って来たのでしよう。

### 少納言入道信西

## 第8話 平治の乱

さてこの信西というのは、実名は藤原道憲といい、不比等の子の武智麻呂の遠孫であって、大学頭季綱の孫にあたり、もとは儒者の家に生まれたのですが、その妻が嘗て後白河天皇の乳母を勤めたことがあったために、天皇がご即位になると、俄かに厚い信任を受けて、万事につけて天皇の相談相手となり、大いに勢力を得たのです。

保元の乱に天皇方が勝利を得たのも、一つは彼が最初から抜け目なく手配りをしたためであったとも言われるくらいで、見ように依っては、保元の乱は藤原氏の摂関政治に復そうとする左大臣頼長の野心と、院政となつてから自然に出来た院の近臣の勢力との衝突であったともいえるのであります。そして近臣側が勝利を得たのは、即ち少納言入道信西が勝利を得たのであって、信西の勝利は武士の努力に依つたのですから、この乱の始まった後に、彼が武士の中で最も勢いのよい平氏と結んで、ますます自家の勢力を強めようとしたのも不思議はないのです。

けれども、これがために武士の一方の棟梁である源氏の義朝の感情を害したのは失策でした。多分、彼は自分の勢いが頗る盛んなので、大抵の無理なら通して通らぬことはないと思つたのでしょう。

しかし、まだこれだけならばよかつたのですが、信西にとって不利なことが続いてもう一つ起こつた。それは藤原信頼を敵にまわしたことです。次にその事情を述べます。

### 藤原信頼

後白河天皇は在位僅か四年で、御位を御子第78代二條天皇に譲り、上皇となつて院政を始められた。政治のご相談相手はやはり信西でしたが、その頃、上皇のお気に入りの方に入りの臣下に藤原信頼という者がいて、何かというと、信西と意見の合わないことが多かつた。

信頼は道長の兄の道隆の八世の孫でしたが、その家は道長の系統に圧せられて、久しく高い官位に上つた者もなく、父も、祖父も、皆年を取つてから漸く従三位に叙せられたくらいでしたのに、信頼の世になつてからは、後白河天皇のおぼしめしで、頻りに官職が進み、保元3年には28才の若さで正三位に叙せられ、中納言右衛門督にまで昇つた。それにも拘らず、彼はなお高位高官に望みをかけていたが、ついに上皇にお願いして右近衛大将になろうとしました。

上皇はその願いをお聴き届けになるおつもりでしたが、ある時、信西にご相談なさると、さらでさえ信頼のわがままを苦々しく思つていた信西は、「信頼などが大将になろうものなら、大将には誰でもなれると思わせるようになりましょう。以つての外のことでございます」といつて、固くお諫め申したので、信頼の任官はお止めになりました。

### 信頼と義朝との結託

この時から信頼は一層深く信西を憎んで、いつかはこの怨みを報いてくれようと企てた。既にそのころは、上皇の近臣の中にも、又、天皇のご臣下に中にも、信西が余りにも勝手に権力を揮つてゐるのを快く思わない者が多かつたので、信頼は彼らを次第に身方に入れて、密かに謀を進めていた。けれども、信西には清盛という有力な武士の親類があつて、それを後ろ盾にしているから、こちらも、そ

## 第8話 平治の乱

れに対抗するだけの武士を身方にする必要がある。

清盛に対する武士は義朝です。しかも、義朝は信西に対して怨みを抱いているのです。信頼の一味の者が第一に彼に眼を着けたのは不思議ではない。義朝は信頼から信西排斥の企てを告げられると、彼もまた密かに待ち設けていたことであるので、喜んでその身方に加わった。

### 信頼、義朝らの挙兵

こうして彼らが時機の来るのを待っていると、二條天皇の平治元年12月4日、平清盛は子の重盛らをつれて紀州の熊野に参詣に出かけた。機会はこの時と、信頼、義朝らは急に兵を集めて、12月9日の夜、不意に上皇の御所である三條殿を囲んで、信西を捕らえようとした。

ところが、信西は、その日、早くも形勢の不穏なを感じて、御所を逃げてしまっていたが、信頼、義朝らはもとよりそれを知る筈がなかったので、先づ上皇をお車に乗せ奉って、皇居の一間にお遷し申してから三條殿に火を放って乱入し、門々を固めて信西を探し求めた。けれども、いつも御所にいる筈の信西は勿論、その妻の紀伊二位も、俊憲、貞憲らの子まで1人も手に入らなかったため、信頼は別に兵をやって信西の邸をも焼き払わせた。

のみならず、信頼は不心得者にも上皇及び天皇を別々に皇居の一間に押込め奉って、自由には出入りも出来ないようにした。目ざす敵は信西1人であったのに、何という彼らの凶暴であったろう。上皇の御所に押寄せて、これを焼き払った上に、なおこの無礼をさえたのです。考えの足りかたたためたは、いえ、暴逆の罪はついに免れることが出来ません。

しかも、信頼はその夜から内裏に在って、上皇と天皇とを擁してほしいままに政権を握り、自分かかねて望みの大臣大将となり、義朝を従四位下播磨守に任じ、その子の頼朝を従五位下右兵衛佐に任じ、その他の一味の者にもそれぞれ官位を授けて、独りで得意になっていました。

### 信西の死

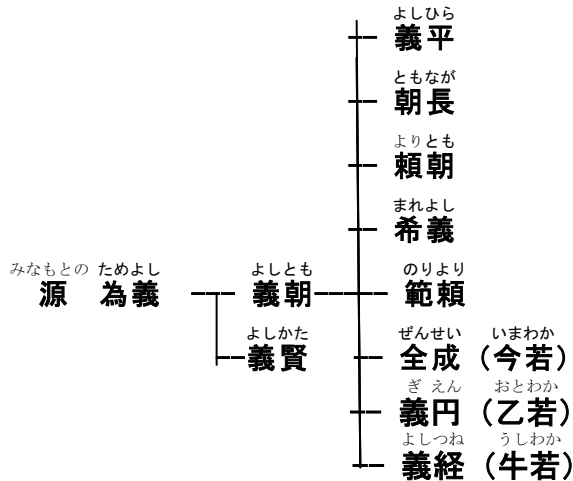
さて、信西は四人の家来をつれて大和の田原という処まで逃げて行ったが、そこで京都の御所の様子と、既に追手が隈なく彼を捜索している事を聞くと、逆も逃げおおせるような気がしなかつたので、4人の者に命じて地面に穴を深く掘らせ、四方に板を立て並べた中に入って、僅かに大きな竹の節を抜いたのを口に当てて息をしながら、その息の通うところの外は、悉く厚く土をかぶせさせてその下に隠れていた。

が、それさえも遂にわかって、追手の者が向ったので、信西は穴の中で人声を聞きつけると、今はこれまでと覚悟したのであろう、掘り出して見ると、まだ息は通っていたが、胸骨の上に刀を突き刺して自殺していた。追手の者はその首を斬って京都に帰り、西の獄門の前に晒した。世間の人はこれを見て、保元の乱に、絶えて久しい死刑を無理に執り行って、義朝に親を斬らせた報いである、と喜んでということでした。

### 軍の評定

## 第8話 平治の乱

第一に目指した信西は既に殺した。残る敵は清盛である、いかにしてこれを討ち取るべきか？この軍議のあった時に、義朝の長子の義平は、「わたしに兵を下さい。直ぐに阿倍野 — 今の大阪市の南方 - へ駆け向って、清盛らが帰って来るのを待ちうけて討ち取りましょう」といったが、信頼は、「何も安倍野まで出かけて行って、馬の足を疲らすことはない。都に帰って来てから討てば沢山だ」といつて義平の言葉を用いなかった。



### 悪源太義平

義平はこの時 19 才の若者でしたが、中々の勇士で、計略にも長けていた。15 才の時に武蔵の大蔵というところで、叔父の義賢と戦ってこれを殺したので、世間の人からは悪源太と呼ばれていたが、彼は却ってこれを得意として、自ら鎌倉の悪源太義平と名告っていた。今度、父の義朝が京都に兵を挙げると聞くと、取るものも取りあえず、大急ぎで馬を飛ばして、鎌倉から馳せ上って来たのでした。

既にたびたび合戦もして、一度も負けたことのない勇士だったし、第一、戦争に就いては、武士の意見こそを採用すべきであったのに、ほしいままに押成った俄か大将の信頼は、あっぱれ自分に勝つ見込みでもあるかの如く、義平の言葉を抑えて、これを用いなかったのです。ちょうど保元の乱に、頼長が為朝の謀を用いなかったのとよく似ています。

### 清盛らの帰京

さて、都にそういう大事件が起こったとも知らずに、清盛の一行は熊野を指して紀州の田辺まで行った時に、十日の明け方に京都の平家の邸から立てた早馬の使いに追い付かれた。何事かと驚いていて聞くと、九日の夜にこれこれですと云って、三條殿の焼き討ちから信西の邸を焼き払った事を述べた。これは信頼と義朝とが相談して、平家を滅ぼすための企てだという専らの噂であるという、清盛は呆れて、「どうしようか？」と迷った。子の重盛は、「君が逆臣のために悩まされ給うに、どうして武臣としてお救い申さずにおられましょう」と父を諫めて、急いで都に引き返すことにした。

### 清盛、天皇を自邸に迎え奉る

清盛らが都に着いたのは12月17日の事でしたが、この7日ばかりの間に、信頼は内裏に在って、散々にわがままの限りを尽くしたのみならず、全く無能な政治家であることも暴露したので、忽ち一味の者か

## 第8話 平治の乱

あいそ ら愛想をつかさされ、彼に背いて清盛に内通する者が続々と出た。清盛はその者らと心を合わせて、12月25日の夜、密かに天皇を御所の一間から出し奉って六波羅の自分の邸にお迎え申した。この時、上皇も密かに御所を抜け出でられて、仁和寺にお入りになったが、誰一人として知る者もなかった。

### 日本一の大間抜け！

のぶより 信頼がそれを知ったのは翌朝でした。彼はその夜も酒に酔って寝ていたのだが、ほのぼの明けに人からこれを告げ知らされても、容易には信じないで、押込め奉った御座所を一々見てまわってから、始めて呆れて青くなったといわれている。それほどまでにも、彼はとんまな男だったのです。

ですから、一旦、天皇が六波羅へおいでになったと知れると、廷臣らは我もわれもと争って六波羅へくるま車に向けて、主上のおわしまさぬ内裏に残ったものは、信頼の子や兄弟の外には幾人もいなかった。彼らは、とんと虻が目を抜かれたような形でぼんやりしていた。義朝はこの有様を見ると、信頼を「日本一の大間抜け！」と罵倒したが、信頼は一言の返事も出来なかったといわれています。

### さて、皇居は今は六波羅に遷った。

のぶより よしとも 信頼、義朝を討てという勅が清盛に下ると、彼は謹んでお受けして、嫡子の重盛、弟の頼盛、教盛らを大将として内裏を攻めさせた。清盛は、主上が彼の邸においでであるから、ご守護の為にとて留まったのです。

しげもり 大将軍の重盛は、いざ出陣という時に兵を集めていった。「年号は平治である。都は平安城である。われらは平氏であるから、三つの事がよく合っている。敵を平らげることに何の疑いがあるう！」と。すなわ 即ち3,000余騎を三手に分けて、ようめい 用明、たいけん 待賢、いくほう 郁芳の三門に押寄せた。

### 大臆病人信頼

のぶより よしとも 一方、信頼、義朝は、今は明らかに朝敵となったのだが、今更どうしようもなかったから、いさぎよく平家の軍を迎えて戦おうと待っていた。のぶより 信頼は美しく、かつちゆう きかざ 甲冑を着飾って、こがね 黄金作りのたち は太刀を佩き、姿ばかりはいかにも堂々と勇ましく、あっぱれ大将らしくふるま 振舞いながら、ひとま 紫宸殿の一間に座を構えていたが、平家のいさ 勇んで押寄せた3,000余騎のとき 関のこえ 声がどつと響き渡ると、今まで偉そうに見えた様子は忽ち消えて、がんしょく 顔色は草の葉の如く、お 階段を下りるにも、ひざ 膝がふるえて下りかねた。

ようや 漸く馬に乗ろうと、引き寄せたが、ひとな 人並みすぐれて、ふと 肥った大きな男が、よろい き 大きな鎧は着ているし、馬は大きいし、乗りかねてまごまごしているので、侍が2人つと寄って、はや はやくお乗りなさい」と押上げると、余りに押しすぎたのか、左手の方に乗り越してどうと落ちた。急いで引き起こして見ると、顔には砂が一面について、はなぢ みぐる 鼻血が見苦しく流れている。なるほど、これではしんぜい 信西がいったように、とて 逆も近衛大将となる資格はない。でものぶより 信頼は、鼻血を拭いて、ふと 馬に揺乗せられると、かきの 待賢門へ向って行ったが、とて 逆も物の役になぞ立ちようには見えなかった。

### しげもり 重盛、内裏を囲む

しかも、そこへ押寄せて来たのが敵の大將重盛である。彼は500余騎を率いて押寄せ、この門に向  
 って大音声に、「この門の大將軍は信賴卿と見るは僻目か、斯く申すは桓武天皇の後裔、太宰大貳清盛  
 が嫡子、左衛門佐重盛、年取って23」と名乗りを挙げると、信賴は返事もせず、「それ防げ、侍共」  
 といって逃げ出した。大將が逃げ出せば防ぐ兵士は1人もいない。互いに先を争って逃げたから、重盛  
 はいよいよ勇んで、大庭の椋の木の下まで攻付けた。

郁芳門を守っていた義朝がこれを見て、「悪源太は居らぬか。信賴という大臆病人が、待賢門を早  
 破られたぞ。あの敵を迫出せ」と呼ばわると、義平は、「畏まりました」と駆けて行く。従う者には  
 鎌田兵衛政家、熊谷次郎直実、斉藤別当実盛以下の16騎、義平を加えて17騎。いづれも一騎当千の  
 荒武者が轡をならべて馳向う。

### 待賢門の戦い

かくして義平と重盛が奮戦した有名な待賢門の戦いが始まった。  
 義平は大音声をあげて、「この手の大將は誰人ぞ。名乗れ、聞こう。斯く申すは清和天皇九代の  
 後胤、左馬頭義朝が嫡子、鎌倉の悪源太義平という者ぞ。生年15才に、武蔵の大蔵の軍に叔父の義  
 賢を伐って以来、度々の合戦に一度も負けたことのない者だ。年積って19才。見参せん」とて、重盛  
 の500騎の真中に割って入り、西から東へ追いまくり、北から南へ追いまわし、縦、横、十文字に敵を颯っ  
 と蹴散らして、「葉武者共に眼をかけるな。大將軍を組んで討て」と命を下すと、大將を組ませまいと  
 防ぐ平家の兵らが、100騎ばかりで中を隔てた。

悪源太をはじめとして17騎の者共は、重盛1人に目をかけて、大庭の椋の木の中に立て、左近の桜、  
 右近の橘を7,8度まで追い回して組もう組もうと攻めつけた。この17騎に駆り立てられて、逆も叶わ  
 ぬと思ったのか、平家の500余騎はさっと門の外に引き退いたが、さすがに重盛は残念に思ったと見え、  
 馬に一息継がせたとすると、更に新手の500余騎を率いて、まともや大庭の椋の木まで攻め寄せた。

義平は駆け向って、見回して、「兵は皆新手であるが、大將は元の大將の重盛だぞ。今度こそは取り  
 逃がすな」と命を下すと、勇みに勇んだ17騎が我れ先にと進んで行く。平家の兵らは今度も百余騎が中  
 に隔てていたが、颯々と蹴散らせられて、路を開いた。義平は弓をば小脇に搔い挟み、鎧を踏ん張り、  
 突っ立ちあがり、左右の手を挙げ、「幸いにわれは源氏の嫡子であり、貴殿は平家の嫡子である。よい敵  
 だ。寄れや、組もう」といいながら、先の如く椋の木の下を五六度まで追い回したが、重盛は逆も組んでは  
 叶わないと思ったのか、まともや颯々と門の外へ引き退いた。





京都 平治の乱 待賢門の戦い 平重盛 (左) と 源悪源太義平 (右)

義平は2度までも敵を追いまくり、弓杖を突いて暫く馬の息を継がせていると、義朝はこれを見て、家来の一人を以って、「汝がよい加減に防げばこそたびたび敵が駆け入るのだ。あれを早く追い出せ」といわせてやった。「畏まりました。進めや者共」という義平の命の下に、相も変らぬ17騎が、どつと門の外に討って出て、100余騎の敵の中に面も振らずに割って入ると、すでに逃げ腰になった平家の兵は一支えもせず、都の大通りを六波羅に向って、とつと逃げました。

### 平家の計略

しかし、これは平家の計略の一つであったのです。というのは、この時の内裏は、その前年に新しく出来上がったばかりなので、若し火事にでも遭ったら大変だと思ったのと、いつまでも敵兵の信頼や義朝に内裏を占領させておいてはならないのと、わざと逃げて、彼らを内裏からおびき出して、そのあとに身方を入れ替えようとしたのです。それとも知らずに、勝ちに乗った義朝は逃げる平家を追っかけて、義平と共に六波羅の邸に迫って行った。信頼もそのあとからおづおづと続いて出たが、彼は六波羅とは反対方向に向ってこそこそと逃げた。

源氏の軍は平家の邸に押し寄せると、どつと関の声を挙げる。その勢いの盛んなのに清盛は驚いて、あわてて鎧を着たが、冑をあべこべに被ったので、侍共が「冑がさかさまです」というと、恐れられたように見られたと思ったので、清盛は、「主上がこちらにおいでであるから、敵に向えば、主上にうしろをお見せ申すのが失礼なので、わざとさかさまに被ったのだ」といったといひます。

ところが、この時にはもう天皇が六波羅においででの事が一般の武士にも分かったので、今まで義朝の身方であった同じ源氏の頼政、光保、光基というような人々まで、義朝と共に朝敵になるのを嫌って、六波羅の攻撃には加わりたしなかつた。そのために、義平らが非常に奮戦したにも拘らず、源氏は小勢で、朝からの軍で疲れているのに、平家は新手を入れ替え、入れ替えて戦ったから、ついに源氏はさんざんにうち破られた。

しかも、内裏は既に平家の一隊のために占領されている。源氏は後へも先へも進みも引きもならなかつた。義朝はもはやこれまでと覚悟を決めて、討ち死をしようとしたが、鎌田政家らが達て諫めて、一先づ東国に下って再挙をはかることにした。

### 信頼の醜態

義朝が義平、頼朝以下を従えて、京都を立ち去り、北に近江路を指して八瀬にさしかかると、うしろから呼ぶ者がある。見ると信頼だ。早くから逃げたのだから、もう疾うに遠くに落ち延たことと思っていたのに、どこかに隠れていたと見えて、今義朝らを通るのを見て、一緒に東国に連れて行ってくれるようにいうのです。義朝は余りの憎さに腹を立てて、信頼の卑怯を罵り、持っていた鞭でその左の頬をぴしりと打った。信頼は一言の返事もせず、おどおどしながら、頻りに鞭の痕を撫でていたが、やがてすごすごと引き返して、仁和寺においでの後白河上皇にお縋り申して助けていただくとした。

けれども、彼は謀反の発頭人であったのだから、折角、上皇の口添もあつたけれども、清盛は赦そうとしなかつた。ついに死罪を宣告されて、その日のうちに六条河原で斬られたが、その斬られる時にも、「重盛は慈悲深い人だと聞いているのに、どうして信頼を助けてくれないのか」と身を悶えて泣いたり喚いたりして、最後まで醜態の限りを尽くしたということです。

自分に勇気も力もなく、人に頼って事をしようとする者の末路は大抵こういうような事になるものだが、それにしても、あれほどの大事をたくらみながら、何という意気地のない臆病者であつたのだろう。

さて義朝は、大勢一緒に落ち延びるのに都合がよくないからとて、途々、家来共に暇を取らせて、美濃の国に入った。頼朝は途中でおくれ、朝長は手傷のためについに倒れたので、ここで義平をば兵を集めに飛騨の国に遣わして、自分は鎌田政家と金王丸とを連れて尾張に向かい、政家の妻の父である長田忠致をたよって、知多半島の野間というところに着いた。時は平治元年12月29日の事です。

### 義朝の最後

忠致は上べは厚く義朝をもてなして、めでたく新年を迎えさせたが、密かに子の景致と相談して、義朝を討ち取り、平家の恩賞にあづかろうと考えた。が、相手は小勢であっても、名将の事ではあり、家来共々も中々の勇士であるから、普通では逆も討てない。で、正月3日の夕方、義朝に風呂をすすめ、彼が裸でいるのに乗じて、かねて命じておいた3人の壮士をして刺し殺させた。

その時、金王丸は刀を持って湯殿の番をしていたのだが、義朝が湯から上がる時になつても浴衣を持ってくる者がなかつたので、自分でそれを取りに行つた隙を狙って、隠れている壮士らが飛び込んだのだ

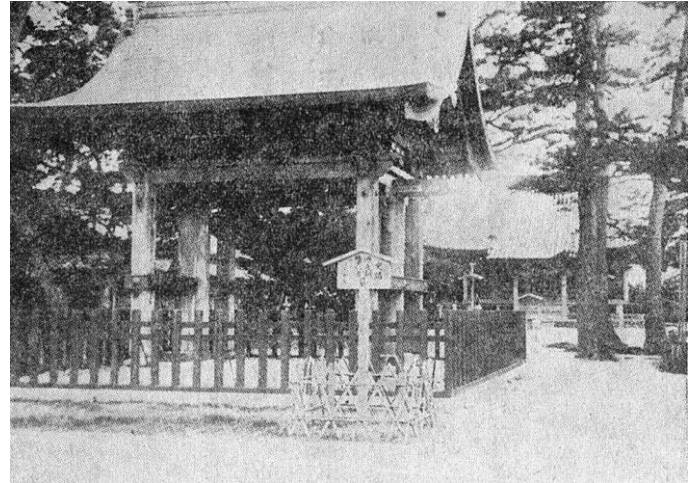


## 第8話 平治の乱

った。 こんおうまる 金王丸は走り帰ってこれをみると、にく やつ 憎い奴ばら、一人でも除すものかと、あま 湯殿の口で3人を斬り伏せた。

かまた まさいえ 鎌田政家は舅の ただむね し 忠致に強いられて酒を飲んでいたが、よしとも 義朝が討たれたと聞いて驚いて飛び立つところを、かげむね うしろから景致に殺された。 よしとも まさいえ 義朝も政家も年は38才でした。

ほうげん 保元の乱後の よしとも しんぜい うら 義朝が信西を怨み、清盛を敵とする気になったのは もつと 尤もだといえるが、のぶより 信頼のような、げい のう 芸も能もない大間抜けと事を一緒にして、いっしょ ついに むほんにん 謀反人と呼ばれたのは しっさく 確かに彼一代の失策でありました。



知多 野間の大御堂 (北境内に けいだい よしとも 義朝の墓がある)

それにしても、信じて頼りにして来た家来のために、むざん だま う 無慙にも騙し討ちにされようなどと誰が思ったでしょう。

ただむね 忠致はもともと源氏の家来でした上に、まさいえ しゅうと 政家の 舅 でもあったので、彼らが安心して身を寄せたのに不思議はなかったのです。 ことわざ しかし 諺 にも、いんが 因果はめぐるといわれます。 ちよくれい 保元の乱の時に、勅令が おも 重く、ためよし どうしても父の よしとも まさいえ 為義を斬らなければならない事となると、義朝は政家に命じてこれを殺させたのでした。 ふこう つみ ふちゆう その不幸の罪と不忠の罪とが、むく き 今、ここに報いて来たのではなかったか？ いのち 父の命を絶った者と しゅんくん くび やいば あ 主君の首に刃を当てた者との うんめい 運命がどうなるかということ、てん 後の世の見せしめにと、か 天が人の手を藉りて示したのかも知れないのであります。

こんおうまる  
金王丸

こんおうまる さて、金王丸は、あだ 主人の仇を討ち取ろうと湯殿から ゆどの か もど 駆け戻って、よしとも 美濃から義朝の一行を送って来た げんこう 玄光という ほうし 強い法師と共に、おもて ふ き 面も振らずに斬ってまわって、ただむね 忠致親子の かく 隠れている なんど 納戸の口まで行ったが、かべ あつ そこは特別に壁が厚く、とじまり げんじゅう 戸締りが おしい 厳重であったために、おしい ついに中には押入ることが出来なかった。

二人はよんどころなく うまや 厩 に行き、げんこう 馬を引出して是に打ち乗り、おもむ 玄光は故郷に こんおうまる 赴き、金王丸は都に のぼ 駆け上って、よしとも 義朝の妻の ときわ 常盤に こと 事の しだい 次第を ちゅうしん 注進して後、のち 自分はある寺に入って出家し、しょく 諸国を へめぐ 歴廻つて よしとも 義朝の ごせ 後世を とむら 弔った。

この時、まさいえ 政家の妻は夫の う 討たれたことを聞くと、おどろ 驚いてその場に行き、ひとめ 人目も はばか 憚らずに な 泣き崩れていたが、まった 自分は女の身ではあるけれども、ふたごころ 全く二心などないものを、うら いかにも恨めしく思っておいでであろう。 も 若し、このままに生き残って、めんぼく 自分も父や兄と同じ心であったと思われては面目ないと、夫の むなもと 刀で胸元を刺して ひどう 自殺を遂げた。 ひどう 親は非道を働いても、つ 娘はあつぱれ武士の妻としての道を つ 尽くしたのです。

## 第8話 平治の乱

### ただむね まつろ 忠致父子の末路

さて忠致は、娘を死なしてしまったのは悲しんだが、目ざした義朝を討ち取ったのを喜んで、子の景致と共に義朝と政家の首を持って都に上り、大いに恩賞に預かるつもりでこれを平家に差し出した。ところが、重盛はいうに及ばず、さすがの清盛までが、主君と婿とを騙し討ちにした彼の所業を憎んだために、はかばかしい恩賞を下さらないばかりでなく、ぐずぐずしていると、死刑にも処しかねないような噂が立ったので、二人はあわてて尾張に逃げ下った。

その後は世間の人々からも憎まれて、小さくなって暮らしていたが、20余年の後、源氏が平家を討つようになった時に、ついに頼朝のために2人とも殺された。不忠不義の当然の報いであります。

さて、義朝は以上の如く情けない最後を遂げたが、長子の悪源太義平と頼朝はどうなったか？

### よしひら 義平の最後

義平は美濃で父と別れてから、その命のままに飛騨の国に赴くと、初めはその身方につく者が中々多く、一時は勢いが盛んになりかけたが、義朝の討たれた事が伝わると、皆ちりぢりに背いて行って、ついに自分一人となった。それで、いっそ自殺しようと思つたが、空しく死ぬより、親の敵の清盛父子の内を、せめて一人なりとも討って恨みを晴らそうと思ひ返して都に上り、六波羅の平家の邸の辺に潜んで様子を窺っていた。

ところが、運悪く平家の知るところとなって、忽ち三百人の討手に家を囲まれたので、真っ先に進んだ兵を4、5人斬り伏せると、軒に手を懸け、ひらりと屋根に上がって、屋根伝いに逃げた。そして近江の国の石山寺の辺に隠れていたが、ついにまた捜し出されて囲まれた。その時、彼は疲れて眠っていたので、驚いて飛び起きる拍子に肘を射られ、刀を揮うことも出来なくなったために、ついに捕らえられて六波羅の平家の邸に送られた。

彼はそこで、「義平ほどの大事の敵をしばらくでも生かしておくのはよくないぞ。早く斬れ」といったきりで、その後は物も言わずにいたが、やがて六条河原に引き出されて斬られることになると、首斬り役の難波常房という者に、

「敵とはいえ、義平ほどの者を白昼に河原で斬るとは何事だ。保元の乱の時にも、多くの源平の兵が斬られたが、昼は人目にかからぬ西山か、東山かの片辺りで斬り、たまたま河原で斬る時には夜になってからしたものだ。平家の奴らは、揃いも揃って情けを知らない者共である。去年、熊野の帰りを討とうというのを、信頼という大間抜けが差し止めたばかりに、今日、この恥を見るのが残念だ。阿倍野で待ち受けて1人も残さず討ち取ってしまったものを」

という、常房が、「何を今更、返らぬ事をいっていなさる」といったので、義平は冷笑して、「うむ、よくいった。いかにも返らぬ過去の繰言だ。やい、貴様が義平の首を討とうというのか。しっかり斬れ。下手に斬ると、しゃっつらに喰い付くぞ」とて、殊更に首を高くのばして斬られた。時に年は20才でした。その武勇がすぐれて、飽くまでも元気のよかつたことは、保元の乱の為朝とよく似ていま

す。

### 14才の頼朝

また、<sup>よしひら</sup>義平の弟の<sup>よりとも</sup>頼朝は、十三才で<sup>いくさ</sup>軍に従ったのだが、東国へ落ちていく途中で父や兄におくれた上に、雪のために道に迷って、しばらく<sup>おうみ</sup>近江の山中の<sup>かく</sup>農家に隠れていた。ところが、2月の始めに、東国に赴<sup>おもむ</sup>こうと美濃路を急ぐ道で、ふと出合った平家の<sup>やへいひょうえむねきよ</sup>弥平兵衛宗清という者に捕らえられて、六波羅に送られた。

<sup>もちろん</sup>清盛は勿論これを殺すことにしたが、<sup>むねきよ しゆくん よりもり</sup>宗清の主君の<sup>よりとも</sup>頼朝の母で、<sup>けいぼ いけ ぜんに</sup>清盛には継母に当る<sup>いけ ぜんに</sup>池の<sup>いけ ぜんに</sup>禪尼が聞いて<sup>あわ</sup>哀れに思い、<sup>ぜ ひいのち たす</sup>是非命を助けるようにと願ってくれた。これは、<sup>せんねん な</sup>先年亡くなった自分の子の<sup>いえもり より</sup>家盛に、<sup>よりとも</sup>頼朝がよく似ていると聞いたためと、一つには<sup>よりとも</sup>頼朝がせめて自分一人でも生き残って、保元、平治の2度の乱に討たれた一族の<sup>いちぞく ごせ とむら</sup>後世を<sup>あわ</sup>弔いたいといったのを<sup>あわ</sup>哀れに思ったためでした。<sup>もちろん</sup>清盛もこれには非常に<sup>どうわく</sup>当惑したが、父の<sup>ただもり</sup>忠盛が亡くなった後は、<sup>こと たいせつ</sup>殊に大切にしていた<sup>ぜんに</sup>禪尼のいう事であるから、ついに、心ならずも<sup>よりとも いのち</sup>頼朝の命を助けて、<sup>ひる しま</sup>伊豆の<sup>ひる しま</sup>蛭が島に流すことにした。



蕪山 伊豆の蛭が島

この時、<sup>よりとも</sup>頼朝は14才でしたが、<sup>ふつう</sup>普通の<sup>こども</sup>子供とは違って見えて、<sup>せけん</sup>世間の者は、「<sup>とら の はな</sup>虎を野に放ったようなものだ」といって<sup>うわさ</sup>噂し合ったということです。<sup>ちな</sup>因みにいうが、<sup>ひる しま</sup>蛭が島というのは、海の中の島ではなくて、その頃、<sup>かのがわ</sup>狩野川の流れの中にあつた島であつたというが、今は流れが変わったために、<sup>でんち</sup>普通の田地となっている。今の<sup>にらやま ふきん</sup>蕪山の附近

に、その址を示す記念碑が草地の中に建っています。

平治の乱は斯うして大体は片付いたが、もう一つ<sup>ついで</sup>序に述べておきたい事は、後に<sup>よしつね</sup>義経となつた<sup>うしわか</sup>牛若の事です。

### 牛若の母の常盤

牛若の母の<sup>ときわ</sup>常盤は、<sup>きんわまる</sup>金丸丸から夫の悲しい知らせを聞いて後も、しばらくは都に残っていたが、3人の男の子を抱えているという事が平家にわかって、<sup>にわ</sup>俄かにその<sup>たんさく きび</sup>探索が厳しくなつたために、ある夜、こっそりと京都を抜け出し、寒さに手足の凍る中を8才になる<sup>いまわか</sup>今若を前に歩ませ、6才の<sup>おとわか</sup>乙若の手を引き、去年<sup>うしわか ふところ</sup>生まれた2才の<sup>おじ</sup>牛若を<sup>おじ</sup>懐に入れて、大和の伯父の<sup>おじ</sup>処まで逃げ延びた。





三子<sup>やまと</sup>を連れて大和へ遁れる 常盤<sup>のが</sup> <sup>ときわ</sup>

ところが、都では、彼ら<sup>かれ</sup>を捜しあぐんだ平家<sup>さが</sup>が、常盤<sup>ときわ</sup>の老いた母親<sup>おい</sup>を捕らえて、知らぬ<sup>ははおや</sup>というのに、  
無理<sup>むり</sup>に白状<sup>はくじょう</sup>させようと責め問うた。常盤<sup>ときわ</sup>は大和でこれを伝え聞くと、子が親<sup>ため</sup>の<sup>なんぎ</sup>為に難儀<sup>う</sup>を受けるのなら  
ば当然<sup>とうぜん</sup>だが、親<sup>くる</sup>が子の<sup>いそ</sup>為に苦しめられるのを見ては<sup>つ</sup>いられないと、急いで3人の子供<sup>な</sup>を連れて、泣く泣く  
都<sup>やしき</sup>に上り、平家の六波羅の邸<sup>やしき</sup>にまいって、

「子供<sup>かたいなか</sup>をつれて片田舎<sup>かく</sup>に隠れていたのはもとよりわたくし一人の考<sup>つみ</sup>えで、母には何の罪<sup>つみ</sup>もございません。  
どうぞ母をお助け<sup>いのち</sup>くださいませ。又、子供<sup>だす</sup>の命<sup>いのち</sup>をお助け下さいとは申しませぬ。けれども、高い<sup>たか</sup>も卑  
しいも、親<sup>こころ</sup>が子<sup>みなおな</sup>を思う心<sup>こころ</sup>は皆同じ<sup>みなおな</sup>でございます。わたくしも子供<sup>うしな</sup>を失<sup>うしな</sup>いましては、片時<sup>かたとき</sup>も生きて  
いられるとは思<sup>ま</sup>えませぬから、先づわたくし<sup>な</sup>を亡<sup>もの</sup>き者<sup>もの</sup>になされて後に、子供<sup>な</sup>らをばどうともなすつてくだ

## 第8話 平治の乱

さいませ」

と涙を抑えていうと、6才の乙若が母の顔を見上げて、「泣かないでよく申し上げて下され」といったので、常磐はいよいよ涙に咽んだ。さすがの清盛もこれには涙を催し、既に年上の頼朝を助けておく上は、兄をば助けて弟を誅するという訳にはいかないと、即ち3人の子を宥すことにした。但し、3人共に出家させるというので、今若と乙若は間もなく寺に入って坊さんになったが、牛若はまだ乳離れもせぬ幼児であったから、しばらくはなお母の許に留めておくことにした。

こうして平治の乱の跡始末が済むと、源氏は終に全く衰え、勢力のあるのはただ平氏ばかりとなった。しかも藤原氏も既に大いに勢力を失ってしまっていたので、政治上の権力までが自然と実力のある平氏の手落ちて来た。殊にその頭領である清盛の威勢は、まるで朝日の昇るようでした。

( 第8話 平治の乱 終わり。 次は前頁に戻り、 第9話 平氏の全盛 へ )